



我孫子市議会を 市民の手に取り戻す！

落選後の困窮生活からどうにか脱し、生活も落ち着き始めたところ、時折市議会を傍聴するようになりました。一市民になった自分は遠い場所から眺めるだけ。議員たちは議会の中心で主役として活躍している。正直な気持ちを告白すると、妬みや落選したことへの負い目もあり、悔しい気持ちになったものです。

ところが、何度かいくうちに、悔しさとは違う「疎外感」「寂しさ」を感じるようになりました。議会を見に行っても歓迎されている感じがしない。むしろ、「そこで見ていてもいいけど、邪魔するなよ。」と言われている感覚です。

実は、これが、普段市民が議会に対して感じていることなのかもしれないと気づきました。

「市議会は、議員たちだけのものになっていて、市民のものではないじゃないか。」そう思うと、無性に腹が立ちました。議会を傍聴しながら、自分だったら、ああしたいこうしたいという「ある種の欲望」が抑え切れなくなりまして。これこそが、今回人生再チャレンジを決めた原動力となったのです。

かつべひろふみ

正真正銘の無所属

政党、団体等の推薦も頂いておりません。

市議会は、議員のものではなく、市民のもの！

少々、堅苦しいお話を致します。

市民が直接政治に関わる「市民自治」が本来誰もが納得するやり方です。つまり、「直接民主主義」の形です。とはいえ、すべての市民が同じ日時に、一堂に会して議論するのは不可能です。市議会、市議会議員はそのために存在するのです。これが直接民主主義を補完する「間接民主主義」の形です。

だからこそ、市議会議員は「市民の代行者」として議会において、市民に見える形の「公の議論」をしなければいけないのです。**「市議会は、議員のものではありません。市民のものなのです。」**

議会改革は、本来「議会を市民の手に取り戻す」ためのものなのです。

「議会改革」 まずはここから

市議会は、市民の皆さんが議員に直接働きかけて動かしていく場所です。まずは、こんなことを実現出来れば市民に寂しい思いはさせないと思います。

1、本会議初日と採決は、休日開催

(誰もがネット環境下にあるとは限りませんし、生で見たほうが絶対楽しい。)

2、委員会における陳情者、請願者との直接対話 (市民と意見を交わして判断することも大事です。)

3、休会中の継続審議を公に開催する (やっているのを見たことはありません。)

4、急を要する陳情については、ネット受付とネットによる回答

(市民は、急ぎの陳情でも議会開催に合わせて数ヶ月待たねばいけないのでしょうか?)



一緒にやってみませんか!

自分たちでやってみるのが、「市民自治」の醍醐味です。例えばこんなことを考えています。

コミュニティFM局の開設

我孫子市、商工会、市民を巻き込み、コミュニティFM局を立ち上げたい。我孫子市の情報交換、商工活性化、災害時の緊急放送など広い分野で役立ちます。

市の情報がネットのみになるとネット社会から隔離されている高齢者、貧困世帯にはなんら情報が届かないことになります。(貧困生活を送った人間として、まさしく経験者は語るです。)

FMの発信機と受信機(ラジオ)さえあれば、誰もが無料で情報を受け取り、ラジオを通じて情報発信もすることができます。商業施設、公共施設の見晴らしのよい場所などどこにでも放送局を置くことが可能です。

有事、災害時などのために予備の発信機を確保する必要もありますが、コンパクトな装置であれば容易に持ち運びも可能です。

内容も我孫子市内に特化した情報(スーパーのセール情報、市内の交通情報、事故、事件、各学校の行事、不明者捜索、迷子のペット捜索、災害時の避難場所情報など)にすることで、市民は身近で大切な情報にアクセスできます。

「空気水を非常用飲料に」

空気水というのは、文字通り空気中の湿気を回収し抽出した水をろ過して精製したものです。

現在、我孫子市では、断水時の給水として、市内小中学校(全19校)、气象台記念公園(新木)に貯水槽を整備しているのみです。これだけでは、有事の際、我孫子市民すべての飲料水をまかなうことは出来ません。個人的に備蓄していても、火事や水没でその水が使えなくなったら、学校や、新木まで水をもらいに行けるのでしょうか?

給水車が入り込めない状況になった世帯や高齢者施設に、毎日誰かが水をタンクに入れて足で運ぶのでしょうか?

特殊な装置を使用しますが、家庭用で1日5L~15L(季節による)。機種にもよりますが、おおよそ20万程度。個人で買えなくてもいいですが、自治会、公共施設なら安い買い物となります。

持ち運び自在な空気水精製機なら必要な場所に、人数分まかなえる数を発電機と一緒に持ち込めば非常用飲料水の確保もできます。ひとつの選択肢として研究の余地は大いにあります。

過去にはこんなことやりました。



手賀沼ジャズ・フェスティバル 1996

- TEGANUMA Summer Festival 1996 -

1996年当時、若手我孫子市議だった勝部氏の音頭取りで始まったのが第一回手賀沼ジャズ・フェスティバル(1996年)です。場所は我孫子市手賀沼公園で無料でした。

最終日のトリに登場したのがSir Charles Thompsonで、その時の演奏を(許可を得て)8mmビデオで撮影しました。

時間が経ってからのデジタル化なので、一部音声途切れていますが、濃密で素晴らしい1時間半が詰まっています。

実は、Sir Charlesの演奏は無償ボランティアです。我孫子および周辺地域を元気にしたいという主催者側の熱情に同意されたことでした。

感謝に堪えません。

どこかの学校の講堂の片隅にあったという、調律も怪しいピアノに何ひとつ文句も言わず素晴らしい演奏をしてくれたのでした。

「古林治 youtube より一部引用(私の後援会長です。)」



負けてたまるか! 人生の再チャレンジ!

#1 地獄への転落

2007年(平成19年)の選挙で落選。40歳で収入ゼロ。経済的困窮から電気、ガス、水道を止められ、家賃滞納で半ば追い出されるように安いアパートに移る。引越し作業、自販機飲料配送作業、コンビニ店員、プール監視員、学習塾時間講師など生きていくためにバイトの掛け持ち。それでも、ぎりぎりの極貧生活。水道局が水を止めに来た際、「すみません。」と申し訳なさそうに作業を開始。私はそれを黙って見つめるだけ。

そのときの悔しく情けない気持ちは今でも忘れることはありません。地獄のようなどん底生活をしぶとく耐えて16年。ようやく生活も安定して来ました。今は、私のように、人生に失敗した人間**誰もが再チャレンジできる世の中**にしたいという気持ちです。おかげさまで人生の経験知がかなりあがりました。

#2 なぜ、私が死なずにすんだのか?

マスコミの発表では、コロナ騒動の中、生活苦で自殺された方は8000人超とされています。一歩間違えれば、私もこの自殺者の一人としてカウントされていたでしょう。実際、死ぬしかないと考えたことはありました。

電気、ガス、水道が止められていく中で、自暴自棄になったときもあります。そんな時、フィリピン出身の妻が私に言いました。「私が子どものときは、もっと貧乏だったよ。」11人兄弟姉妹の妻は、日本人では想像できないほどの極貧生活を送っていたそうです。彼女の壮絶な苦勞話を聞いているうちに、自分はたいしたことないと開き直ることが出来ました。私の窮状を見かねた空手道場の館長は、空手指導の仕事を手伝ってくれました。現在支部長として仕事をするきっかけになりました。

その日の支払いもままならない私に、日払いの仕事を手伝ってくれた飲料会社の社長も我孫子青年会議所で仲良くしてくださった方です。

また、冬の寒い時期に灯油を買う金もない。たまたま様子を見に来てくれた幼馴染は、黙って灯油を買ってきてくれました。久々についた石油ストーブの火を見て、悔し涙が流れました。寒さが苦手な妻も泣いていました。その後も幼馴染たちは、経済的にも精神的にも援助してくれました。

自分を支えてくれた人たちは絶対に裏切れない。そのためにも私は、絶対に負けられない。**人生のリベンジを果たします!**

【かつべひろふみ 略歴】

1967年3月生まれ(56歳)我孫子で育ちました。根戸小学校、久寺家中学校、専修大学松戸高校、明治大学法学部卒業。アメリカに単身留学。米国カリフォルニア州モンレー国際大学(MIIS)国際政策学修士課程修了(MAIPS)。我孫子市議会議員(1995-2007)28歳で初当選。初めての12月議会で代表質問。1年目から議会改革を実践しました。現在、NPO法人実武道会館 我孫子地区支部長(実践空手道3段) 介護施設職員(一社) 我孫子青年会議所OB

是非こちらも御覧ください!

かつべひろふみ公式サイト「とびら2023」



X (Twitter) @Hirofumikatsube

